文恭院實紀 四十四

文化九年壬申 自正月 至十二月

内閣文庫 和書 類 三六〇六四 號 五五 冊 二三一 函 一四 架

内閣文庫 和書 類 三六〇六四 號 五五 冊 一四九 函 一五 架

史 六〇

内閣文庫		
番號	和 36064	
冊數	55 (44)	
函號	149	36

国立公文書館 National Archives of Japan

文恭院實紀

文化九年壬申從正月
至十二月

修史館書印
日本政府図書

文恭院殿御實紀

文化九年壬申正月元日賀例のことし
二日もまた同し
三日もまた同し謡曲はしめまくおなし
五日濱の庭園にならせらる
六日僧侶祠官の拝賀例のことし此日寺社はしめ
ありよりて所々のものへ饗物あり
七日若菜の祝例のことし高家中條大和守
伊勢戸田備後守　八日京武田大膳大夫
日光山使ともに

大納言殿御使を蒙被命をうけいとま下さる家
八日東叡山
巖有院殿
常憲院殿霊廟に松平伊豆守　代参す去りし
五日御先の参り香射し當士二人に時服を下さ
る家
十日東叡山
諸廟御詣事によて参し
常憲院殿霊廟に土井大炊頭　代参す
十一日冬至の御祝儀のあとし連歌ありしめまつく

同しく千代の声ハ隅（八隅カ）に満てる松の寿昌遠限りハ志
らし麗む天地御句　和田の原浪路も閑に明初る
る阿寄合伊澤五郎　先寄に家寿和雲の系
ましてハ三家のうらく先し御座ゆきしきうこのく
り家
十二日増上寺
惇信院殿霊廟に青山下野守　代参す
十三日す掃りしめあり萬歳の御祝儀のあとし
十四日増上寺
文昭院殿霊廟に松平伊豆守　代参なされに

弓場にしめあそばしをえらせ給ふ御小姓組小笠原
鉄次郎 御殿を務ひ射手の弟子とも黄金を
下さる家室ふ思しへハ三家のつゝしみ出し給ふ
しきうつゝ
十五日月次の賀儀のごとし久き山王の祠へ御
例祭為儀當　代参す備後福山木築首の拝
賀儀のごとし
十六日寄合伊丹靭次郎　火災巡視の事命を
ら家
十七日紅葉山

御宮ふ
成所府給あり
十八日濱の庭園に筆ちそち家
二十日東叡山
大猷院殿
厳有院殿
浚明院殿霊廟
常憲院殿
有徳院殿
孝恭院殿霊廟

源徳院殿
至心院殿霊牌所に参詣あり
廿一日莫能あり
廿四日増上寺
台徳院殿
文昭院殿
有章院殿
惇信院殿霊廟に参詣あり東叡山
孝恭院殿霊廟にも参植村駿河守代参す言
家武田主水大夫 日光山よりまつり猶去日

光明寺あ里しに八百家大澤右京大夫
法供し了慰労ある家ある日
大納言殿に八紅葉山
諸廟に参詣あり
廿六日東叡山
至石院殿霊牌所に参詣例の如く大和守代参す
廿七日小松川の辺より一筆ちきら家先手頭松
浦大膳 捕盗加役北条来家としの正月まで
またまその事ごとく法と出処しけ今きち家松平
加賀守に失しけ法廃事の鶴をつての事きき家

廿八日月次の賀儀のことし有栖川閑院伏見家
の使者はしめ僧侶羽家等業定の拝賀儀のことゝ
し
廿九日増上寺
有章院殿霊廟に土井大炊頭　代参す小笠原
佐渡守　病によりて奏者の事免されて並務のことゝ
し帝鑑間席命せらる家老召し廿七日法楽のをり
賞射し富士二人時被召下さる家
二月朔日西木書院に
每法御出ありひ日光久能東山の賀籙法鏡の餅
いたゝきたまはりて日光門主業定の法對
面あり梶井門跡歓喜心院宮使者はしめ山門総
代日光山総代上野一山の僧中それぞれ拝賀し宗
のこともなく拝賀儀のことし方家中條大和守
伊勢よりまいりて御福す
二日松平安芸守　祖父致仕栄翁　遠江守
父修理大夫に使して法親王の鶴をたまはる
をもて家臣中務大輔　病によりて　本多
安芸守して閉門ゆるさる家
三日松平政千代　病によりて　本多安芸守

しも間さら家
大納言殿よりも法衆をつかう家勤定の為の子
ともめし出されて勤定のことの家もの六人
四日有栖川閑院伏見家の侍者以とまやさ家札物
物あり
五日近江国彦根城主井伊掃部頭直中病により
致仕す領知三十五万石ハ其子玄蕃頭直亮に
つかハしむ其中ハ
十日同家の侍者時下さま進鴆物あり

六日若狭中務大輔頼貴うさしかハ其子上総
介頼徳のもとに　板倉伊豫守　失して其
銀三十枚をくたさる家
七日陸奥国仙台城主松平政千代周宗病によりて
致仕す弟ハしめ伊達徳三郎をもて継子として所
領六十二万五十六石をつかハしむ其周宗ハ
一
梶井門跡侍者ハしめ僧侶ホ以とまやさ家鴆物
あり
八日東叡山

浚明院殿霊廟に牧野備後守 代参す寄合伊
東主膳 火消役となる
十日大番頭中三宅 老免して小普請に入り
褒金を給ふ
十二日増上寺
惇信院殿霊廟に松平伊豆守 代参浚明院殿
霊廟に例の如く高井飛騨守 代参して太刀馬
代金一枚を薦あり寄合 阿部隼人 中川富吉を
命せらる家
十三日松平孝行村垣淡路守 病免して寄合
となる
十五日昨冬の賀儀のおくれしを謝し佳例の御祝儀に
菓子の献賀ありて儀のおくれしを井伊掃部頭直亮家
つきしを謝して徳川家斉公吉の刀馬二足銀黄金
を献ずまた尾張家紀伊家水戸家松平右近将監
いしめ紀州の頼宣卿の家来の七人櫻井大
和守に初しめて尾張家より志水甲斐
守小尾張守へ越へを告て献ず水戸家
の寮司闕而 は左大将 の婚儀を謝して
生まれて後智恩院大僧正 被仰付しめ御祝儀

にまゝ多し掃部頭直亮が家人木俣土佐井伊三
郎宇野木主原小野田織之丞西山内蔵丞荻田次郎
右衛門抜擢す作事奉行岩瀬加賀守　同付
初鹿野伝右衛門　勘定吟味役篠山十兵衛
日光山御宮修復の事命ぜられ以上本巾さ家
十六日小普請より大番子の家督の善人
十七日紅葉山
御宮ハ土井大炊頭　代参す勘定奉行小笠原
伊勢守　ハ松前奉行を兼職命ぜられ石田
播磨守　ハ大目付となり長崎奉行曲淵甲斐

守ハ勘定奉行となり公事方を兼ね命ぜらる
同付青山左衛門尉　奥長崎奉行となる家
十九日智恩院大僧正伝俊天性寺にしめ以上本
巾さる連縁あり
二十日小納戸頭取新之丞　松平栄之丞
奥小姓となる家
廿八日院の庭園に生ずる家薬草に時節あらず
まつ思し三家の可愛く長しめ万石以上の者も
みなに内書を賜ひ
大納言殿より奉書を出さるゝ家

廿二日宮合能勢帯刀　来八月東叡山
浚明院殿法会の事
大納言殿より執行せらるゝによりて警衛を命せ
らる　一
廿三日去冬より廿一日陪従の者射手富士二
人時服を賜ふ目付佐野肥後守　ハ武器修復
多野中務　参備手らハ日光医学館の事命せ
らる
廿四日東叡山
孝恭院殿霊廟に土井大炊頭　代参す　宮家古（戸）

田備後守　京よりこのへ里備す目付榊原隼之
助　参院の安郷巡視の事命せらる
廿五日雪ふりしかハ三家のこのふし使して恵はれし
かうこのふ
廿六日東叡山
蓮光院殿霊牌所に牧野備前守　代参す
廿七日大慈院門跡参着により土井大炊頭
して慰労せらる高家戸田備後守　副使まて
らる
廿八日月次の賀儀のかとし松平和泉守　蔚

新大膳大夫　松平左京兆督　へしめ能対
の勝負事ハ家来の五人私家臣　左京兆督
参陣目を申さ遣　私家臣 実名　ハ長崎の事大膳大夫
参松家の事命ぜら家中為左京兆督　秋
田山城守　松平主税頭　藤堂佐渡守
参らせ江戸山門播本坊宮をれ従諸堂社修復の
助手つとめしかよろしきを以て時服を申さ家松平
総次郎　家臣きしを謝して相模屋次の
刀目巻物名銀を参らするへ見え左右まつ家
老れ家人伊達蔵五郎伊達将監中村日向林保

内記片倉小十郎石田遠家中為伊勢後藤孫兵衛
平賀山城守相備す二條左大臣　ハ
一 大納言殿の結婚儀ま為先の息女の定婚を謝し
一 に使まゐらす日光山重使して山内の桜苞一桶
をまゐらす仍て公へ乗馬あまし右ハ喜山下野
守して慰労せら家にて家左田備後守　副
にまゐ家
臨日を江戸山門播本坊宮をれ従諸堂社修復の
事つとめし松平左京兆督　松平主税頭

秋田山城守　藤堂佐渡守　家人等を以て
禄物あり
三月朔日西本書院ニ出座まして勅使兼院使広橋
前大納言　六條前大納言
御對面あり簾中の御祝として
禁裏仙洞中宮東宮より
西御所への御をくりものの御使のおとし　楠家の跡
勾当内侍の使者公人兄元左をまつ家まて大慈院
院の跡ニハ御祝銚を祝して御對面あり大慈院
の跡院家松林院はしめ楠家の跡使者大慈院の
跡坊官家司公人の家司侍人総代冠帽束帯ニて
御礼ありて見え面まつ家御對面済ありて一両
公人の旅館ニ宿家出陵大膳大夫　の跡の
旅館ニ上杉井勢大輔　御使して指着まゝ一
種一荷をくちもちらの家上巳の御祝として日光の
主使して二種一荷まいりもちらへ三家の一ずつし
使して御祝しくそのまいりもちら家
二日西本書院ニ
西御所出座まして勅使御對面あり京への御返
詞御きを含めて朝廷御馳走に禄物ありその他楠家

御跡の供者伶人冠帽束帯にて御ありてあかし
く暁方まての鐘にまさく大慈院御跡振舞にて末
山下野守供して後朝あり
奉行所より文使参くり拘あり院家坊官家司にて以
多男女まて参内し時服銀子を下さる
三日上巳の節祝儀の如し
四日公方様御跡参詣ありて猿楽あり楽者等三
番叟大社兼束湯谷藤　祝言岩船狂言二番八
幡之参仏所あり三番まてまて要安御膳菓子入あ
まて参詣ありて家

五日参会御田常刀　岩下鎌吉がしめ父
死してより家作まての四人
六日外上の庭園にて御祭ありきそまてより一橋家
神田橋の邸に立参ありまちあまりに公方参詣あ
り
七日小普請組より大奥の家まての十五人
八日東叡山
厳有院殿霊廟に参山下野守　代参し
常憲院殿霊廟所に従例の通甲斐守　代参す
西丸目付小笠原若松東へ　小目付とあり西丸

小十人頭中川総左衛門　ハ同しく目付となり
船手頭九鬼為三郎　ハ西城小十人頭となり
小納戸吉江左門　ハ船手頭となる
九日吹上の庭園に渡らせられそれより清水卿
に立寄らせ給ふまゝに
稲葉播磨守　致仕す所領　ハ其の子卯
花にゆつらしめされ
十日新番頭谷忠右衛門　老免して小普請に入
里褒金を給ふ大乗院門跡のさき発遣あり

十二日増上寺
惇信院殿霊廟に松平伊豆守　代参す松平伯
耆守　松平周防守　青山大蔵少輔　奏
者の事命せらる
十三日尾張中納言　参府により松平伊豆守
使して問はせらる
十五日尾張中納言　参府によりまうのほる
登城御座所にして御對面ありおほしまし事によそ
外在宰相　同しきお特　松平中務大輔
まうのほる家松平加賀守　就封の暇給ひ

御番頭を下さる家松平總次郎　其役加へられ見え
面々其まゝ家作一字を下さる是程四位下少将に叙
任し候奥方宮宗とあるゝ面々備前長久の作
刀作当一足御黄金を面々其まゝ用ひ謝しき福見
すは　子備前國盛重の作刀を下さる家中納言
家人朱膳隼人正　玉置大和守　土屋后
右衛門　荒川豊守　五味平守　加賀守
家人横山監物本多勘解由相福す松平主竹
小笠原伊勢守　越後の眼下さる家作側落蔵左
京亮　子真七郎　旗奉行吉力平八郎

掌子定三郎　供当小笠原玄蕃　子捨太郎
書院番與頭石丸権六郎　子銕次郎
小姓組與頭妻日八十郎　子雄殿兜　西條
徒士頭鳥蘇三左衛門子府三兜　川しめ初見
し面々其まゝ家督の尚多し
十六日越前忠輝江條主馬部番頭陰照卒す遺
領五万石ハ故以子主膳正陰光に致さしむ　此
陰照ハ
西條小十人與頭原田覚右衛門　老免し其小

曾孫ニのり褒金を給ふ小曾孫より西城小姓組
おなしき書院番ニの家ニのをあし八人
十七日紅葉山
御宮ニ参山下野守　代参す新番頭大久保大
隅守　養子喜四郎　ハ父の儀ニ付軍学武
技出精作事奉行岩瀬加賀守　子式部
小納戸土屋伊賀守　養子権五郎　ハ軍学
武技出精小姓武川讃岐守　子隼之助　先
手頭滝口孫左衛門　養子安之丞　多賀三
左衛門　嫡孫当太郎　松浦大膳　子熊之

西城先手頭蜂屋七之丞　養子謙太郎　小菱
目付安藤弾正少弼　子郷右衛門　小菱糀
右衛門　子徳太郎　使番井上仲　養子
式部　横田源太郎　子三四郎　酒井作
右衛門　養子与九郎　西城小姓組与頭菱
沼主膳　子富三郎　徒士頭長坂血鑓九郎
子彦五郎　西城小十人頭丸毛兵三郎
子善四郎　小納戸宮尾徳十郎　子源一
郎　船手頭石野伝之丞　養子右近　勝
槍奉行曽根内膳　養子半三郎　佐膳奉行平岩

與次右衛門　忰子吉之丞　ハ武技出精ニ
よりめし出されて東書の内ニのり為様ニ十人
組與頭内藤新十郎　子当蔵　兵学武技
出精ニよりめし出されて大番ニのり勤定組頭
米倉四郎右衛門　子内蔵助　書替奉行安
井平四郎　忰子清蔵　米倉率行宮橋久米
蔵　子又四郎　ハ武技出精ニよりめし出
されて小十人組ニ入ル
二十日東叡山
常憲院殿三回忌衣おゝし法會ニより御参井伊

玄蕃少輔　代参す
廿二日　交代寄合千藤縫殿也　忰子平三郎
寄合村上三十郎　忰子書院番鍋之丞也
支目付　子書院番権八郎　天野彦右
衛門　子求馬　川しめ文教仕して子家作
くまれ九十九人三十郎　御目付　ハ是比し忰
光料三百苞を下されて寄合医久保玄長　子長
安まゝ同し実禄三百苞十口のうち二百苞
五口を下されける
廿四日東叡山

孝恭院殿霊廟にも水野出羽守　代参す
小笠原信濃守　病により致仕
し其子主殿頭に領知をつかし
められ
紀伊大納言重倫卿をよひ尾張家より去冬しとし
文昭院殿法会のまゐり菓まゐらせきしに
よて家臣めして奉書をわたさる為様小姓前田
周防守　御前し小姓と為家
廿七日井伊掃部頭　父修理大夫　病によ

て請ませまゐに封地つの雌下さまへ羽織を給ふ細川
采女正　それ此農の為の守邦術を農子とさせん
と宗家越中守　ともに請ふによりて命せらる家
米倉章行松高彦五郎　赦免して小普請に
入り褒金を給ふ
四月朔日月次の賀儀のおこし有司上総介
は家作をこりを謝して備前長光の刀并一足巻
物黄金をたまはせまつり小笠原主殿頭　おなし
くる一足御黄金をたまはせまつり見元たまはせまつり家
上総介　右家人岸左膳有司織部有司内蔵助

主殿頭　其家人野邊小左衛門多賀長兵衛扶
偏すまゐ為鷹司左大臣　の北の方為二條大納
言　の北の方ゝ婚儀を謝して生して
其の為にまつ家松平豊後守　依鷹の鶴を為
まつりしを謝して供して二種一荷を為てまつり
家
二日松平豊後守　其使人亀山津石見以上まで下さ
る綿物あり
三日大津後神保右近　子磯三郎　引しめ
父死して家たくまの三人松平左兵衛督　封

地到着を謝して二種一荷を為てまつり家
四日少老水野出羽守　為使依側依用人とな
る為使少老小笠原壱江守　八本使にうつり
又為左兵衛督　八為使少老とな家よりそれ
事布衣以上　のものあまへ芙蓉間にして宿
老たきをつるふ
五日少老小笠原壱江守　依鷹の事命ありし家
鷹司左大臣　北の方為二條大納言　北の
方為臨下さるゝ綿物あり
六日　松平越中守定信為にして致仕

す所領十一万石ハ其の子武部大輔定永にゆつり
し故其の定信ハ田安中納言宗武卿の三子にして
故越中守定邦の養子となり
日光門主舜仁覚山によりて宮家中條　当時仕
して時彼をこくらさる家
七日南部大膳大夫　封地到着を謝して失しつ
其の為にまゐり家
八日東叡山
霊廟代参仕らるへし此産様によりて立てらせす其ハ

其の月の四日男子君生まれさせ給ふに此母ハお益
の方に為御子に五郎君と称しまゐらせ後日光門主
覚山によりまゐらせ御位ら参内登られて御対面あ
り
九日高町薬園に来りてを参らせ其処より
御当殿に立寄らせ給ふに
十日きれいに此立寄ありしを謝して尾張家よ
り使まゐらす
十二日皆上京
惇信院殿霊廟に土井大炊頭　代参す宮家様

撫駿河守　八日日光山
御宮代参として松平甲斐守　八
靈廟代参牧野越中守　遠藤但馬守　参
祭祀の事に預りしものとも召して御膳小納戸左
三上半五郎　鈴木多宮　御膳小姓子家
十五日月次の賀儀れ古としし松平豊後守
侍従右京大夫　伊達遠江守　松平安藝守
松平上總介　藤堂和泉守　丹羽加賀守
松平土佐守　いしめ家親れ年の十八人
豐後守　家人川上右近上村英之助拝謁す

十六日西丸書院番久世三之丞　免しらる小
普請に入り褒金を給ふ
十七日紅葉山
御宮に大御所御参詣あり
十八日松平越前守　松平阿波守　松平因
幡守　松平大膳大夫　松平越後守　松
平大和守　松平備後守　いしめ館林の以
下まで毎年の如く其の三十六人家合三人越前守
ハ備前守阿波守　以下ハ備前守を始め大和
守ハ先しめに出り松平加賀守ハ海…

を謝して失して其手の為にまつる家松平越中守定
永は家能きしを謝しては当錦黄金を為にまつ
る松平楽翁定信為仕を謝して親族を手とし
手の為にまつる家越中守　家人彼部丹後奥平
八郎左衛門矢後右近拝禮す
二十日東叡山
大猷院殿霊廟
右観院殿霊牌所に於ては諸あり当家榊原駿河守
祭祀奉行板倉越中守　土藤備前守
日光山よりまゐりて禮す

廿二日紅葉山に於て宮附伊後守佐老免発仕して褒
銀あり其子奥坊主宗有は為く其父のことく居
宮附を命ぜらる家
廿三日
大納言殿羅漢寺のほとりへ来りたまふ家松平陸
奥守斎宗其父政千代周宗の病免其子より本多
若狭守　出して問ひたまふ家
廿四日東叡山
孝恭院殿霊廟に於て老中小笠原佐渡守　代参
す松平甲斐守　日光山よりまゐりて獨及西楽

小性組番頭西尾筑前守　同しく先手頭夏目
和泉守　病免して寄合となる
廿七日　院の療治に奉りける家ある医桑島吉郎
右衛門　老免後仕して褒銀あり子兄習新地
寄合ちる子父の職命ぜられ家禄相違なく同宗
うきしこの八陸奥守斎宗のもとに斎井重郎正
使して銀五十枚を給ひのりす家
廿八日　拝従の賀様のためとし細川越中守　八
しめて御封の以とまゐりて松平國岩吉の佩刀
賜ふを下さる家秦親のちの二人美濃兵人まかる

同しく未様御養子遊ぶ上人佩きぬを謝して兄え
寄まかり家
廿九日　増上寺
有章院殿霊廟に佩詣あり
五月朔日　拝従の賀様のためとし　端午の佩祝とし
て日光山主失して二種一荷をまゐらせる家　松
平大和守　封地到着を謝して失して其の寄
寄まかり家
二日　端午の佩祝として三家のこうさしくしめ万
石以上のさもこうで失して時服を寄まかりる

大納言殿へも御寄し

三日又犯しゝ家臣御家人五人出撲遊

行上人以上差下さる時役替編ふ

五日端午の御祝儀此まゝし

六日信濃守上田城主松平伊賀守　病死により

跡依す所領五万三千石ハ嫡子左京大夫へ継

つゝがなし起きされ　す

此日御定嗣ことつとめし　代官勤定ことくのとも

ありて編局あり

八日東叡山

厳有院殿

浚明院殿霊廟へ青山下野守　代参す

九日井奥小姓久世大和守　病免す美濃苑

一人以上下さる

十日東叡山

常憲院殿霊廟へ松平伊豆守　代参す

十一日小普請より大番へ家来の一人

十二日増上寺

惇信院殿霊廟へ土井大炊頭　代参す

十三日那須苑一人以上之参府之家
十四日増上寺
文昭院殿霊廟ニ松平伊豆守　代参す岩窟
東山下野守ヽ　日光山への隨臣下之参ニ随生参す
して猶見あり随ひ職を下之家ニ人組ニ頭松平
美作守　西城小姓組番頭ニあり鉄砲ニ而奥田
付四郎左衛門　西城先手頭ニあり来ルヘ東職を
兼しめらる
十五日月次の賀儀のあとにし上杉弾正大弼　あとしめ
りしめ参観の主の二人松平甲斐守

就封以上之参府之家主の二人甲斐守　八
陸奥守下之参之家伊達遠江守　参ニ至る　初見
して為之参川家松平伊賀守　家ほをし之樹
して為一足鐙黄金を為之参川家之見え為之
参川家松平家人木村解由松平為書指す
井伊掃部頭　就封到着を謝しニ伏しニ
二種一荷を為之参川家
十七日紅葉山
御宮
御廟ニ随行あり高家中條河内守　日光山

陪宮ニ遷宮ニよつて
其陪所陪侍差合せらる　御下之家
二十日東叡山
大猷院殿、
有徳院殿霊廟ニ土井大炊頭　代参す
廿一日仕当役務勤員　小十人頭井戸新右
衛門　病免しられ寄合となる
廿二日松平阿波守　封地到着之謝しられ使
しられ其の為まいる
廿三日松平備後守　封地到着之謝しられ使
しられ其の為まいる
廿四日増上寺
台徳院殿霊廟ニ土井大炊頭　代参し東
叡山
孝恭院殿霊廟ニお忍植村駿河守　代参
す
廿五日重役思候依様毛利美濃守寓所病ニ
よつて致仕す前領二万石ハ嫡子若狭守ニ
ゆつのし杉まれ家臣ハ

廿八日尾張中納言 於居宰相 同じきお
将に使して菓子を贈らる 家より
登城し給ひによりて中納言 宰相
に謝し給はる 此のうち家宰相殿毎々将軍に
くらうまゐらせし謝をも述らる家 松平越後守
封地到着を謝して生しなる二種一荷をたてまつ
川家
廿九日光姫君 吉松君 又姫君 保之丞君 要之丞
君とうまる
張廣所の傳中し参らせしと家よりて尾張殿のつくく

謝して生ま参らす
晦日 将上る
有章院殿霊廟に松平伊豆守 代参す 日光門
主御寺ありしによりて家大友因幡守 使
して慰労せらるる家中條河内守 日光山より
かへり 福す 中奥小姓 堀田伊勢守 西人組
の頭となり 清麗所傳用人 各務主膳頭 西
丸裏門番の頭となり 中奥小姓 黒川左京 小
十人頭となる家
六月朔日 月次の賀例のことし 井伊掃部頭

きしめて就封の暇たまひ和蘭国正広の御刀を賜る
菓子下さる松平讃岐守　参観す就封の暇を賜ふ
与ふるもの又二人
二日日光門主御本丸よりまかり出る御対面
あり青山下野守　日光山よりのぼり給ふ
三日為孝裏門番三郎浅井半左衛門　米沢子書
院番頭三郎　いしめ又死して家広く五の六
人寄合医員康栄云　子栄庵まへ同じ
五日尾張中納言　使して菓子を賜ふ
家小普請より大番組へ家五一人

八日東叡山
浚明院殿霊廟に牧野備前守　代参す
御霊前にて廣御書三郎植山三郎左衛門　御目見
用人より御手の日
大納言殿より東叡山
惇信院殿霊廟御霊前御詣あり
九日東叡山
浄圓院殿霊廟に青山下野守　代参す　御坂
井擅大輔　朝鮮信使来聘の事を掌りし勤
労をよみせられ恩貸の金一万三千両は返納

まをよりかくとあり

十日武蔵国金沢領主米倉丹後守昌俊卒す嗣子なし諸氏ハまゝに朽木土佐守綱方叔父信濃太郎昌寿を養子として遺領一万二千石を継がしむ亡兄昌俊ハ

西條書院番頭蔭平左衛門　老免して小普請にのり褒金を賜ふ

十四日柳原式部大輔　けしめ参覲のもの十七人

寄合一人

十六日増上寺

惇信院殿霊廟に詣給ふの事　天気よくて寄し松平伊豆守　代参す

十七日土用に入りしのハ淵諸方家諸元奏者當まうれありぬれバしけるにのゝ日光門主欽名院宮任しいまゝにハ樹香を手向らせらる家増上寺方丈同しく出して生霊執成を為しまつる家

小笠原大膳大夫　松平越中守　酒井左衛門尉　法号を下されて既封の賜為まゐらせ代同

しく帳無事の家々の二十六人寄合一人越中守
石川主殿頭　松平伊賀守　大関土佐守
内藤下総守　はちしめられあり
十五日山王の社に詣例の通り甲斐守　代参して
太刀黄金一枚進薦あり尾張中納言　失し
て菜雉鷄をたてまつらる
十六日嘉定の佳祝儀のごとし
十七日紅葉山
御宮に松平伊豆守　代参す西丸納戸頭佐橋
君右衛門　老免して寄合となり時服を給ふ

十八日松平紀伊守　松平大膳大夫　松平
甲斐守　封地到着を謝し使して手のた
てまつらる
十九日暑中を問せられ主として日光門主
増上寺方丈に檜重をくたさる
二十日東叡山
有徳院殿霊廟に詣給あり
廿六日西丸鑓奉行森山源五郎　老をつ病
免す代官富田清兵衛　老免して寄合となり
時服を給ふ小屋方庭作添番柳澤次左衛門

無て老免致仕して褒銀あり子次郎吉家を
きゝて無事に父の職命ぜらる家
廿四日東叡山
常恭院殿霊廟に若老堀田摂津守　代参す
寄合横山内記新番頭となる家
廿五日端午に付時服を賜ひまつりし三家のごとく
りしめ例のとしころに内書を賜ひ
大納言殿より奉書をも賜はる家
廿六日表右筆組頭鈴木権右衛門老免して
褒銀あり

廿七日浜の庭園に成らせらる家生當長崎半左衛
門　病免して寄合となる家
七月朔日月次の賀儀の如くし　土井甲斐守
本多越中守　水野日向守　八板倉加賀
にさゝ事へとまゐらさまに小笠原主殿　りしめ
就封のいとま賜る家ものゝ三人亀井隠岐守
またしめ兼親の家ものゝ二人松平越前守　井伊掃
部頭　松平周防守　封地到着を謝して
使して無事にまつる家長崎奉行荒山左衛門
謝　赴任の暇下さる

二月高木當為野半之丞　病免して家督
をゆるさる　代官稲垣藤四郎　免ぜられて小普請
に入り猿楽金春を補ふ
三月寄合神尾五郎三郎　子錦太郎
しめ父死して家つぐ其の十人寄合医峯岸
寿菴　子寿悦　寿菴同じ春悦　多
禄二百苞のうち百七十苞をさづけ家寄合
富田甲斐守　おなじ行業となる
四月日光山宮仕して七夕の法税として二種一
荷をおくさづけらる家宗對馬守　朝鮮信使来
聘により費用あてしをよくとゝのへ金二万
五千両を編かりさ脱に恩貸の一万石三万両ハ
十年をのへて来る午としより二十年に収む
るべしとあり
六月七夕の法税として三家のこころへなしめ係
のともころより供して饌料をあたへまつる家
七日七夕の法税救のあとし
八月東叡山
浚明院殿霊廟に土井大炊頭　代参す中様
安房上総のあたり饑饉劉への事をわりし

勘定奉行柳生主膳正　小笠原伊勢守
勘定吟味役篠山十兵衛　時服を御小座敷ニて
御物差あり
十日越後国村松領主堀丹後守直温卒す嗣
子なし請ふまゝに水野和泉守忠光四男三右衛
門主税を嗣子とし遺領三万石を襲しむ其の
直温ハ
十二日増上寺
惇信院殿霊廟ニ牧野備前守　代参[illegible]

従吉野山花僧右衛へ　尚中右衛門名代として
十四日紅葉山
御廟ニ仮詣あり東叡山
有徳院殿霊廟ニ仮例菅沼左京亮　代
参す
十五日盂蘭盆会ニより東叡三縁山ニ施物をく
らせらる事例のことし　其の日
大納言殿浜の庭園ニ遊ハせらる
十六日松平越中守　封地到着を謝して使して
二種一荷を奉らせらる

十七日紅葉山
御宮江牧野備前守　代参す
十九日先手頭多賀三右衛門　西城普請奉行と
なり勘定吟味役川窪七郎右衛門　西城納戸
頭となる
二十日御書院番石尾主馬　病免して寄合となる
廿四日東叡山
孝恭院殿霊廟江少老植村駿河守　代参す
廿八日月次の賀儀のことし　松平陸奥守　は
しめて就封の暇を賜ひ其後恩行光の脇刀を下

さる稲葉丹後守　参覲す細川越中守　暇
を謝して使して其の為に中川る陸奥守
家人鈴木荘人拙福す使番内藤隼人正
小姓組松野八郎兵衛　大坂目付命せられ暇
下さる
晦日使番小笠原兵庫　先手頭となる
八月朔日當賀儀のことし
三日鑓奉行佐橋長門守　嫡子西城小姓組
番入す　はしめ父死して家つくもの八人
小姓大久保筑前守　小納戸となる

四日寄合堀田四右衛門　嫡孫小姓組大次郎
戸田和泉守　子若林小納戸藤四郎　一
色源三郎　養子源八郎　美濃高木修理
子金二郎　引しめ父致仕して家を継く
の十八人寄合医鷹井宗寿　子宗寿　小
普請医大膳亮杏寿　養子宗寿　まて同し
土佐守　和泉守　ハ予のし養女の料三百
苞を紹ふ酒井左衛門尉　封地致着を謝して
供して二種一荷を奉りまいらす
五日奏者番唐津城主水野和泉守病によりて致仕
して子式部少輔忠邦に所領六万石をつかはしむ
去の忠光ハ

七日紀伊中納言　治女諸姫の方松平陸奥
守子定姫の事牧野備前守　青山下野
守　依仕してて備るさまさま陸奥守
めしてて命をうけ家老松平伊豆守　牧野備前守
守　青山下野守　松平能登守　水野出
羽守　子大奥にして清露の雲雀を下さる家
八日東叡山

浚明院殿霊廟ニ青山下野守　代参ありて後先
植村駿河守　堀田相模守をめし其の勤
労によりて越後縮五反を給ふ
九日榊原越中守　以上ニ下さる
十二日増上寺
惇信院殿霊廟ニ牧野備前守　代参ありて釈奠
ニより昌平坂聖廟ニ法例巨勢日向守　法役
して太刀黄金壱枚を薦あり　ニ大奥ニしての法府
十三日君光土井大炊頭
の霊前を下さる

十四日代官布施孫三郎　免しられて小普請ニ
入り褒美金を給ふ
十五日月次の賀儀の事をし奥平大膳大夫　めしめ
見参の其の九人奥右丹後守　めしめ
能村の職務を家其の七人米倉治議右郎
めしめ寄り水野和泉守君郡家つきし
を謝しあり一足織黄金を為其まつ兄元
為其中川の家能村の職下さる達修の事命を
の家其の家人水野平右中村伝右衛門相福
すまし黒田甲斐守　其子力之助　交代

寄合金森左京　子丸病而免し無之ニ付
家従嶋牧野右衛門　駿府目付命せられ以
ときの下さる家
十七日紅葉山
隠居子青山下野守　代参す二丸留守居筒
井佐次右衛門　為持徳士郎とも家見小納戸
東條源太衛門　二丸留守居となる
十八日濱の庭園ニ
寄隠所第ニとニ家
二十日東叡山

仁観院殿霊廟ニ土井大炊頭　代参す同日向
守鉄砲持並伊東隠岐大夫　卒す嗣子ニ
しよそ清ニまてその才縁五郎　を嗣子
とし遺領五万千八十石餘をつかし起出九
火消役武田玄蕃　如し先組のものとも他抜
兄分のきり時刑のものへ振舞下さる家
廿四日東叡山
孝恭院殿霊廟ニ井伊伊豆守補　代参
す

廿五日予左少将　御髪そらせまゐらせしによ
りて土井大炊頭　御使して御物　又二種
一荷奉る　又一種をおくらせらる家まて左
家より出して御前しくさうけら家よりて御父子
まうけのまゐりたりしかは御座所にして御對面ありて御手
つからの御盃をまゐらせらるゝ御物　又御
佩刀吉清光の御刀を御みつから家同し事にて又
御臺所御簾中よりも御姫君よりもまゐらせらるゝもの
ありて左家よりまゐりて謝して出まゐらせす
廿六日美濃守一人賜はりて家

廿八日一橋民部卿　御女英姫のこの松平
安藝守　子郁丸へ定婚の事牧野備後守
土井大炊頭　御使して　をつかはされまゐらせ
備中　めしてはからせらる家
九月朔日月次の賀儀のおとし久世大和守
牧野の賜はりものまひ松平備中守　松平縫殿頭
柳沢信濃守　小笠原備前守交代寄合松
平主殿　寄合戸田彦次郎　発駕府加
賀にて稲葉伊豆守　息女の
定婚をなして一種一荷をうけて家

勘定吟味役岸彦十郎　関東川にて夢猿によ
り以とよのりにいる一橋民部卿　御女英姫のうく
定婚を祝ひて尾張のこのよしをまゐらする日光
に至近て御山ねより高家武田左京大夫
御使して梨子一籠をくるとて家
二日重陽の御祝として二家のうちより一め
万石以上のもの二万石出しての時彼を為てまり
家
大納言殿へもおくりし寄合荒宗主水　為
御側同井若様附　中奥小番次　弁奥

小姓となりしたる　参学校の事儒臣林大
学頭にまさしつきて候と御座しと命せらる
家
三日日光山至宮山ねよりまゐれる外なる家猿楽
あり当能ハ儀通生田敦盛二人静籠鉄須磨
源氏狂言二番萩大名梟鏡ありし三番すきてま
餐をまつ進席にまして料理を給ふ
四日日光山至重陽の御祝として生しまて二種
一荷をまゐらする父死して家つぐ御家人六人
七日出羽忠米侍様至上杉弾正大弼　病によ

を被仰付所領十五万石ハ元の如く式部大輔
に給ハりし趣なり

八日東叡山
浚明院殿霊廟に御詣あり同しき所
厳有院殿霊廟にハ松平伊豆守　代参す宮
家宮京極西大郷　八日光山
院宮代参役酒井大和守　ハ御神しき祭祀の
奉行命せられ是以上東下さる家
九日重陽の御祝儀のことし

刀未作カ可校

十日東叡山
常憲院殿霊廟に青山下野守　代参す
十二日増上寺
惇信院殿霊廟に土井大炊頭　代参す
十三日上総国久留里城主黒田豊前守　病
によて致仕す所領三万石ハ嫡子刀之丞　に
給ハりし趣なり

十四日増上寺
文昭院殿霊廟に松平伊豆守　代参し

清揚院殿靈廟に　青山大藏少輔　代參
す
十五日月次の賀儀のあと　上杉彈正大弼
家督をつぎしを謝し奉り　黄金拾兩銀の刀目録一足　御
黄金をたまはり黒毛の馬をたまはり其家人本
庄近江守尾崎四郎兵衛竹俣美作島津左京莅左九
郎に春やう拜謁す　増山備中守　ゆるしめ就封の暇
たまはり家のもの二人太田丈三郎　六角伊賀守
子孫吉　紀伊家の同家野呂彈正　嫡孫茂
四郎　初見してたまはり家丈三郎　家人女房

與右衛門山田宗右衛門拜謁す　松平陸奥守
病身を謝しまうしてそのものをたまはり家をたまはり青蓮
院の跡寒室の僕をまゐらせける
十七日紅葉山
法宮
諸廟に法施あり
十八日尾張のこゝろし僕して口切茶をまゐらせける
家
十九日青蓮院の跡僕者ゆるしめ暇たまはりて觴物
あり

二十日東叡山
大猷院殿
有徳院殿霊廟ゟ土井大炊頭　代参す高家宮
東照宮大猷　祭祀の奉行酒井大和守　日
光山よりこえり福す寄合牧野半右衛門　火
消役ハ寄合衆
廿一日若君のほとりへ出ろきゝ衆
廿二日松平下総守　参観を供當青山牛大夫
書院番堀田帯刀　大坂目付をうつ之
り福す寄合青山鋭之助　高家右門　要

藤五郎　小姓小野伝蔵　子駒八郎
供番神尾市左衛門　子徳之助　為林書
院番奥坊石巻三左衛門　子勝太郎　小納
戸曲淵五左衛門　養子継殿助　ハしめ初見
し高きゝ申川衆もの当多し
廿四日増上寺
台徳院殿霊廟ゟ松平伊豆守　代参し東叡
山
老恭院殿霊廟ゟ少老小笠原近江守　代参す
上杉弾正大弼　文恭院殿　封地温泉の湯

の事請ふによて御ゆるさる遣彈正大弼　めしに
總朔あり日光山より帰りし御家有馬玄蕃大
輔　法会にて慰労せらる
廿五日吹上の庭園に来らせらる吹上より田安邸
に立寄らせ給ふ
廿六日　日光山より御寺ありしによてまうで此たる
並法対面あり
廿七日寛永寺御霊屋に参らる　火災巡視の事命せ
らる
晦日増上寺

有章院殿霊廟に土井大炊頭　代参す　寛永薮
三郎右衛門　来八月池上本門寺
紹徳院殿法会のうち警衛の事命せらる
十月朔日月次の賀儀のおとし太田原山城守
岩下鍋次郎　初見して家をつがる
二日對馬守府中様より宗對馬守義功病によて
致仕する所領二万二千四百二石余は甥の子岩千
代義質に繼び朝鮮通の事命せらる初而
是まで家政は後見中務大輔　にてしらしめ遣はさる
とありて中務大輔　にもとの事ゆだねらる

此の義ハ

三日落合土佐河内守　子長三郎　ハしめ父

死して家たつくもの十一人

五日住師辰の住祝として当家諸ゑ奏者番布

衣以上諸見以上上出仕者のこらす一二席ニて各ニして

餅酒を下さる

六日先手頭杉本五郎左衛門　子半三郎

使番市川肥後守　子吉三郎　書院番與頭

石丸権六郎　子勝次郎　為様裏門番の頭

山田清大夫　子三十郎　小納戸永田濃八

郎　裏子無之　為様納戸頭水野藤右衛

門　子金之無　田安郎用人高村総左衛

門　子市三郎　一橋郎用人米田嘉大夫

子堅蔵　新番與頭太田八十郎　子半

十郎　大番與頭青山数馬　子鉄五郎

覚五郎左衛門　子粮之無　小普請組頭小尾

大七郎　裏子七次郎　ハしめ出さまニて安

番のうちにてのこり小普請組頭三植保次郎

子鉄太郎　住蔵所廣家番之頭佐藤山伊右衛

同子又右衛門　使番中使廣安當三郎細
田太郎左衛門　書院番子勝三郎　納戸組頭佐久
間久五郎　、書院番子六郎　代官野田源五郎
書院番子歡十郎　ハめし出されて大番の子達
勘定組頭披殺弥藤　書院番子劉次郎　拂ふく
金奉行井山左五郎　書院番子榮太郎　藥掛使
膳所臺所組江見新五郎　書院番子久米三郎
各めし出されて小十人組の子弟をめして藝
技出精によりて賞あり
七日小笠原大膳大夫　封地到着を謝し使
して二種一荷を奉らせらる
八日東叡山
浚明院殿霊廟に牧野備前守　代参す
十二日増上寺
惇信院殿霊廟に青山下野守　代参をまうし
ひ雲鶴の法施祝れまうし
十四日増上寺
文昭院殿霊廟に法語あり
十五日月次の賀儀のまうし　信州彦波守　宗
名一柳帳之助　鍋府樣加當をて悔り福す

甲府勤番支配八木丹波守　小姓組番頭となる
十六日　紅葉山
御宮に松平伊豆守　代参す
十八日吹上の庭園に幸したまひそれより一橋
卿に立寄らせたまふ
廿一日駒場野へ放鷹として幸したまふ所上様
出座所　湯浴として米津に到着を謝して供
しける二種の菓を賜はされけり
廿二日火消役蒸田将監　松平主税　織部
手縁へ

廿四日池上本門寺
浚明院殿百回忌法会により牧野備前守
代参し本門寺に施物白銀をくだされ東
叡山
霊屏所には松平伊豆守　代参し同じく門主
に白銀をくだされ門主には謝して供まゐら
せまゝ同じき所
孝恭院殿霊廟には荒井伊予守補　代参
す
廿五日浜の庭園に幸したまひ家重臣に時服を与

にまつりし三家のつゝしりしめ万石以上のもの
よりも内書を給ふ
大納言殿より奉書をおくらる
廿七日出まし廿五日将軍の参り参射し当世一
人時役を給ふ
十一月朔日月次の賀儀のおとし　織田芳次郎
松平壱岐守　子与市　初見しおてまつる家
勘定吟味役松山総右衛門　浦港へ雇下さる
三日大坂金奉行篠長足奉行酒井主税　子
金三郎　ハ武技出精大坂寄奉行鈴木内蔵也

嫡子鏡次郎　ハ問学武技出精によりめ
し出されてもの大番士の家
四日交代寄合石川乃房　嫡子義六郎　寄
合本布吉之也　子小太郎ハしめ父死して家
後くまの七人勘定吟味役松山総右衛門　子
久三郎　めし出されて番当のうちにのこる
六日徒士組頭米山権右衛門老免して褒賞あ
り
八日東叡山
浚明院殿霊廟に土井大炊頭　代参す書物奉

行啓遊ばさる　先発して小普請奉行にのり褒金
を賜ふ奥おる奉書の事はとめし松平陸奥
守　加家人等時服銀子を下さる目付花野中
務　駿府町奉行とあり寄合阿部隼人
正誠等とともに火消役となる
九月書院番阿部四郎五郎正春　は為様小十人頭
となる
十月日光門主諸侯のもとにまかりて来りしの妻は
上京の事松平和泉守　法使して位きつのは
さる

十一月皆上る
常憲院殿霊廟に松平伊豆守　代参す火消役
阿部隼人　めしてさとし秋組のまのことも今
技見分のあり皆年のまゝ一銀子を下さる
十五日月次の賀儀の古とし松平備前守　は
しめ家親のまの二人宗岩千代　家はさへしを
謝して安藝守利康の刀ある一足綿羊金を与へ
まゐりき兄左衛門の家人氏江大織守
田隼人大森繁義拙獨す書面刀を賜ひ　同じく
家はきこしを謝して兄左衛門家それ家人

若中勝右衛門田原四右衛門拝領す土方大和守
駿府城加番にてつとめ中卒す今日大奥にて
しらせ要之丞君御髪置の御祝あり留守居信濃
守等勤む　右勤すみてより法生敷にし
て見え給ひてまつり芙蓉間にして御披を給ひ
大奥にして要之丞君より奏者番に服を下さる
十六日目付初鹿野伝右衛門　法務手及縮目
死聖堂医学館の事を兼行すべく命ぜらる
十七日紅葉山
御宮へ土井大炊頭　代参す日光門主供にて
口切茶を給ひまつる家
十八日寄合高井藤左衛門は中川番を命ぜらる
甚左田麟平　は火災巡視を命ぜらる家
廿二日下野国大田原城主大田原山城守光清病にて
より致仕す所領一万一千四百一十六石は長子経
次郎愛清につがしむ光清は
播磨国林田領主建部内匠頭政賢まかりし所領
一万石は嫡子鶴太郎政醇につがしむ政賢は

同しき日山崎縫殿主水大和守居まて同し所に
一万石ハ遣れ子冨三郎忠居数ちつのりしをされ忠居ハ
廿三日裏門切手番の頭和田主税　免しらる
小普請に入り褒金を賜ふ小納戸に仕事年久し
牧野将監　小姓に命ぜらる
廿四日東叡山
常憲院殿霊廟にて老中植村駿河守　代参すへく
郭内火ありしのハ三家のかたへ使して宿家結束
奏者番まうけたりし後しきうしのちに勘定奉行
松平玄蕃頭　為様御奉行に兼ぬ

廿五日天守番三郎為兵衛大夫
廿六日交代寄合金森左京　子九郎寄合
森山源五郎　書院番小姓組安藝守　大久保加賀守
子為右衛門　はしめ父死して家継くとも
十七人源五郎　ハ書院老の料三百俵を下さる家まて
佐藤井伊掃部組頭宇野幸次郎佐藤家掃部殿
役宮川半七郎表佐藤殿人殿組左衛門ハ老免致
仕しけるに褒銀あり
廿七日浜の庭園に集まりて家筋小姓組中根平右

忠勤　老免して小普請入となり褒美金を給ふ　五家

御留守居の事つとめし南部大膳大夫

人々時服羽織を下さる

廿八日百人組の頭堀田幸之助は甲府勤番支配

となり先手頭荒川常次郎は目付となる

廿九日去冬より廿七日まで将軍のをかり参謝し富士一人

時服を給ふ

晦日老中土井大炊頭　紅葉山

将軍霊廟参詣の事奉行の家に命ぜらる

十月朔日月次の賀儀のごとし

二日大奥にして老中松平伊豆守　牧野備前

守　土井大炊頭　青山下野守　松平能

登守　将軍家の御養子下さる家基の御宮参儀のごとし

し

三日より霊前ありしものは三家のこゝろくりしめ在府

四位以上のともからつ仕まいりしを三家諸侯奏者番

まであり〳〵しきこゆのみに小姓組番頭蒔田備

中守　書院番頭権佐　御定奉行岩松宗奉行

小笠原伊勢守　子三九郎　大番役井根主殿

子修七郎　同じめ父死して家法くその九人

四日霊前にのりしハ三家の一つかし仕し高家
諸氏奏者番まゐれ右は諸大名しきうつかへに菜
養の謂かまく同し
五日霊前にのりしハ八日光門主歓喜心院宮増上
寺方丈出まゐらせらる寺社奉行松平右京亮
小普請奉行田井筑前守　目付榊原隼
之助　勘定吟味役梶野平九郎紅葉山
御宮霊廟修復の事命せらる
八日東叡山
浚明院殿霊廟に奉り山下野守　代参す播磨
王小野朝臣一柳土佐守末昭卒す嗣子なし諸
ふまゝおきその身　三郎末国を嗣子として遺
領一万石をつのしむ土氏末昭養
小姓組番頭八木丹波守
守　諸家法給仕の事命せらる　松平越中守定
永文致仕果翁と號す御実母ゝかきしつの八　左
川大次郎　出し家帝尉せらる家
九日寄使番天野大和守　小普請奉行と家
り普請奉行牧野大学　八寄使番ちまと寄り火

溜役土井左門　ハ百人組之頭となり寄合大
久保隼人　ハ大溜役となり勘定吟味役被仰
萩右衛門　ハ二丸留守居となる家士の日小普請
三浦久太郎　其父致仕蒙給　罷ありて
追放せらる
十一日尾張中納言　のもとへ　寛賀山城
当　隠居しても隠居の鶴をくりてもちくる家よりて
謝してまちり北尾ち家大嶋第年常刀　老免
してい小普請子のり饗金を給ふ
十二日増上寺

惇信院殿霊廟に牧野備前守　代参す霊ふ
果して八二三家のうちへ供して隠居しきこえのへ
ひ家
十三日小松川のほとりへ隠居鷹狩として数をさら
御拂籠候のおとし宿中を間りむかうまて供し
て東叡三縁寄山に檜金をくりとちら家
十四日紫宸の綿ぬまく同し
当
十五日月次の賀儀のおとし従五位下北野出羽
従四位下に北面る大村上総介　りめ
条勅の事の五人那須苑一人供当牧野若衆へ

駿府国付まて〻このたひ福寺まてし十三日除朱
のたまひ多尋し当番出立人時彼是申さ承
十六日従四位下上杉弾正大弼　松平土佐守
参上之子侍従侍従し宗尚五代義質従四位下
侍従子叙任し嫡男当年ゟあまり多あ伊達遠江守
子主当　ハ従四位下子叙し大膳大夫と
あまり多あ従五位下子叙せ家臣の十七人土屋総
三郎　ハ相模守黒田かミ之典　ハ上総守大
田原礼次郎　ハ能登守森内記　ハ勢守当
米倉治積太郎　参丹後守織田芳太郎

ハ大和守建部鶴太郎　ハ内匠頭本多富之丞
ハ和泉守仙石越前守　子主税　ハ讃
岐守甲府勤番支配堀田章之典　ハ河内守松
前奉行猪飼久右衛門　ハ備後守為株留守居
牧野大学　ハ大隅守御奥小姓大久保刑部
ハ能登守太田彦十郎　ハ内蔵頭大嶋雲
斎　ハ伊勢守稲葉主税　参紀伊守ゟあまり
多あ一人ハ紀伊中納言　ハ家目付の　ハ
請ハ前よりまたあり　ハ和野能登守　めて
法多くて家奥医関本位典　石坂宗哲　法

眼ニ御家布衣の士ニ加へらるゝ其の九人大御役
伊東主膳　牧野半右衛門　阿部平人　岩
永井勝　大久保采女　御広敷御用人桂山
三郎左衛門　御留守居伊沢主水　小十人頭黒川
左京　新番小十人頭阿部四郎左衛門　あり
御養の猶猶の事としまして大奥にして新番頭
側御用人水野出羽守　小光松村越河守
井伊左京亮掃部　堀田相模守　小笠原壱岐守
有馬左衛門佐　水野壱岐守　本丸御書
の廉下さる家

十七日紅葉山
御宮
諸廟ニ御詣あり日光門主御養の御貌として生
しきニ種一荷をまいらせらる家
十八日水戸宰相　その事にも　安藤出雲
守　御供して御霊屋の御徳をいくらせらる家よりも
その八講して中よりおいて家日光門主迫て
光山あるにより御家の川丹後守　御供して
御後枝樹をいくらせる家奥様あり
十九日松平伊豆守　八諸家其譜の事業あり

しきてに八丈織十反堀田摂津守わたし事に
よりて山城守に廣の法刀堀田若狭守　同し事
によりて和泉守右廣の法刀をわたし法雲寺にわたして
又元角に来り里より来て下さ家に京町奉行小出
谷和泉守　勘定奉行もあり出事にてこれ令
きう家
二十日日光山より迎に紫山よりまうけけるき
饗きうまてに法要事あり
廿一日千住の法とりへ法放庵にして法事をきう
家業養の法税としてに二家のうちにありしめ男石以

上のとしまうり仕して時彼を成てまける
大納言殿へも物わりし東叡山縁起尾張へ家に
出して八代客相をしくきう家勘定にて松江
十次郎　光晃しても小普請にのり饗銀をわたし
廿二日大黒屋信西　高観寺先手組小笠原権
九郎　子左三郎　小納戸新見七右衛門
子雅太郎　ありしめ初見しておそまつるものため
多し
廿三日諸家京家の事つとめし大目付井上美
濃守　目付佐野私従守　をよび徒士頭山

曽倍十郎　稲垣信十郎養同次郎左衛門　八
助役を勤へきの役所屋のとをこふりて四十五人勤
相差ありしか去冬より二千石日光御朱印のとあり引請し當
十四人助役を下さる
廿四日東叡山
孝恭院殿霊廟へお光堀田摂津守　代参す
増上寺方丈小石川傳通院　集養院殿としる
まいりれ石りずの為にまいらる稲葉紀伊　叙尋
しを構應いたさるあひ為なる稲垣信濃守安芸信濃
當　書院番小姓組平吉　寄合京國事有衛

嫡孫鑾之丞　清水金次郎　書院番西丸
田中一郎右衛門　書院番支配　りしめ父
祖父死して家つかへくるもの二十四人
廿五日お光井伊掃部頭お使　近年多病によりて
職免されて帝鑑間席命せられ是数年の勤労
を賞して従四位下に叙せらる家大番頭京極周防
守お光とおなじよりその事布衣以上上に立
のとをこふりて芙蓉の間に列して當免列せしめ
松平伊豆守　古き事を結ぶへし
廿六日東叡山

浚明院殿霊廟に　林肥後守　代参す　中奥
小姓松平求馬　叙爵して但馬守と改む
新番頭横山内記　布衣の士に加へらる家菊縁
留守居番一色兵庫頭　病免して寄合となる
小普請より大番にめさるゝもの八人
廿七日　出羽国本庄城主六郷大和守　卒す　遺
領二万二千一石餘は其子伊吉に継かしめ
らる
陸奥国盤〔磐〕城平城主安藤対馬守信馨卒す嗣子
なし請ふまゝに其兄図書信厚が子新次郎信
義を嗣子とし遺領五万石を継かしめ鴈の間
席命せらる　其の信馨は
廿八日　月次の賀儀のことし　巣鴨の辺まておなりし
上杉弾正大弼　宗対馬守　松平土佐守
来ん〔ん〕とし巣鴨の婚礼のあり若出を命せらる家
文化六年
二月二十日　二條大坂在番の士の合力米これ
まゐらせて禄一俵に給ひしのものに五百石まて

一倍増の餘ハ徐々の多少を以て増す所ハ五万石
迄の所も五百石まてハ一倍それ餘ハすへて千石を下
されし事と命せられ畢 己亥雑記
六月廿四日村々の細する浪人をあつむる事によって
令せられ追放あり 寛法
十一月四日川崎程谷のあたり大に地震きこえ本陣
それ修裂す 不知双紙
十月廿一日信濃国佐久郡西山村農夫總右衛門
の子亀松といへる十一歳にして狼を殺し父を助
けし事あるによって褒せられて銀二十枚を与

へらる 不知双紙
十二月廿六日諸家系譜の事によって去ハ去しめ寛
政十一年正月十七日堀田摂津守正敦請ひ申す
によりて寛永以来の系譜書進さの事命せられ堀
田豊前守正敦[穀]ニハ摂津守正敦ニ副ての事命
せられ大目付一人目付二人奥右筆組頭一人奥
右筆六人に及ふへく命せられ正敦豊前守正穀
の部に増の局を設られ家中にて書進さの事を
あつめ免て主作によって出しし十月ニ以毎月
朱切す一千五百三十巻あり名ずけて寛政重修諸

日本政府圖書

一家譜ニハ序文ハ二山毅志毎ニ先ち家凡例目録
十巻あり　政化写記

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan